
今、希望の光へ

テツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今、希望の光へ

【Nコード】

N3356D

【作者名】

テツ

【あらすじ】

16歳の誕生日を迎えた青年は力を得て旅へ出る。そこで学ぶ事。命とは、運命、宿命、使命。かけがえのないものを守るため…旅立つ。

拙い文章ですが、頑張りますので応援お願いします！

第一話　朝の登校

俺……信じるよ。

今、自分にある力は君らを守るためにあるんだって。

これは……うん。そうだね。希望の光だね。

『今、希望の光へ』

ジリリリリリ！……！

机の上に置いてある目覚まし時計が慌ただしくなった。

「……ん。」

ベットの上から手を出し、必死に時計を探すがなかなか辿り着けない。

「……おらっ！」

とっとう痺れを切らし、ベットから勢いよく飛び出してスイッチを

切った。

「ふわぁ〜……眩しいな。」

窓から差し込む太陽の光りがとても眩しかった。近くに木があり、小鳥たちのさえずりも聞こえてくる。

部屋が二階なので、ちょうど木の所にいる小鳥が見えるのだ。

「さてと……。」

大きな伸びをし終えると、青年はパジャマのまま一階のリビングにへ向かった。

リビングでは母が朝食を作っており、食卓には、サラダ、パン、牛乳とまさに朝食と言ったメニューが並んでいた。

「あら？珍しいじゃない。」

母が焼き終えた玉子を皿に写して食卓に持ってきた。

「いつもお母さんが起こさないと起きないのに。」

と言いながら、椅子に座り手を合わせて
「いただきます。」と言って食事を始めた。

「ま、今日は始業式だしな。」

「確かに、初日から遅刻したら元も子もないものね。」

「そゆこと。」

俺は簡単に食事を済ませ、一旦部屋に戻る。そして部屋のクローゼットを開け、制服を取り出した。

それはまだ真新しくて、新品の匂いがぶんぶんしていた。

「これが今日から着て行く制服か……。」

これを着るのは入学式以来だな。

「上手くやってけるかな……。」

青年は弱音を吐いた後、自分の事を苦笑した。

制服に着替えた後、ポケットに入れてある生徒手帳を手に取った。
一ページ目には顔写真と名前が書いてある。その写真が少しおかしくてちよつと笑ってしまう。

その下には自分の名前が書いてある。岳宮佳佑と。たけみや けいすけ

身仕度を済ませ、玄関へ向かおうとしたときだった。

「今日は何の日か知ってる?」

と母が聞いてきた。

「……俺の誕生日。」

「正解!」

そう。今日は俺の16回目の誕生日なのだ。4月9日、始業式の日
に生まれたのだ。

「だから早めに帰ってきなさいよ、大事な話があるから。」

少し表情が曇っている。質問しようとしたが、少し嫌な予感がしたので何も言わずに外に出た。

家から学校までは、徒歩十分。普通、高校と言えば電車通学か自転

車通学なのだが、家から高校までが非常に近いので徒歩なのだ。だから、この高校を選んだのだ。

校門に近付くと、三人くらい教師と見られる人達がプリントを配布している。あれは恐らく、2、3年生に向けてのプリントだろう。なぜなら、俺はプリントを貰わなかったし、受け取っている生徒が「また一緒だね!」と話しているからだ。

校舎の中に入り、1年1組を目指す。入学式の際に、一度行っているので迷う事はないだろう。

1年1組は、三階の一番奥の教室だ。中に入ると、クラスは半分以上埋まっている。俺もかなり早く出たつもりだったが、それより早く来ている奴がこんなにもいるとは、少し虚をつかれた。

女子などは既にグループを作っているが、男子は携帯をいじったり、机に寝伏せたり、わいわいしている所もある。

自分の机に向かうときだった。

「佳佑!」

と、あまり高くはないが良く聞こえる野太い声が俺の足を止めた。

第二話 友人、帰宅

そこにいたのは中学時代の友人だった。名前は佐井間武志だ。中学時代はいつも一緒に過ごしていた。たがら親友のような仲だ。

「武志か、お前来んのはえよ。」

「いやあく始業式だろ？初日はやっぱり気合い入れて早めに来たってわけよ。」

武志は笑顔を見せた。中学時代はこの笑顔が良いと、女子からも人気があった。

「で、お前の席はどこ？」

「佳佑の横だ。」

「またかよ……。」

そう、中学時代は三年間同じクラスで、何故かかなりの確率で席が近くなるのだ。まあ、そのお陰で仲良くなれたのだが、高校生にまでなって席が近いのは少し勘弁してほしいのだが……。

そんなことを考えていても何も始まらないので、武志と一緒に席へ戻る。

席に着いてから数分後、担任と見られる先生が教室に入ってきて、自己紹介が始まった。

「はあ……自己紹介か。」

机に頬杖をつき、ため息をついた。

そして数分後、とうとう自分の番に回ってきた。

「次。」

担任のこの一言で席を立つ。

「は、はい。」

何人かがこちらを見ている気がする中、佳佑は息を吸い込んで自己紹介を始めた。

「え、え〜と……岳宮佳佑です。こ、これからよろしくお願いします！」

今度は息を吐きながら席に着いた。

やっぱり自己紹介は苦手だな。

始業式だけなので、軽く明日からの授業の説明などをした後下校となった。

一人で階段を下りている時だった。

「おーい。」

声がしたので途中で振り返る。

「あれ？武志じゃん。どうした？」

「いやさ、今日は佳佑の誕生日だろ？どっかで飯食ってごっせ。」

「…あ、悪い…明日にしてくんない？」

「…女か？」

「ば、ばか！違うわ！」

まあ、母さんを女と考えたら女なんだけれども……。

「まあそゆことだ。…じゃ。」

と、武志を残し帰路に着いた。

第三話〜岳宮家〜

昼になる少し前、佳佑は家に戻っていた。母が作ってくれた昼食を食べ終わると、急に睡魔に襲われ、自分の部屋で寝てしまっていた。次に目を覚ました時には18時になっていた。そんな時間帯でも、もう外は真っ暗になっていた。お腹が空いてきたので、晩飯を食べようとリビングへ向かった。

いつもこの時間になると、母が食卓に料理を並べているのだが、何もなく、母が何もせず座っているだけだった。

「母さん…?」

俺の声に反応したのだろうか、体を少しビクツとさしたあと、ゆっくりとこちらに振り向いた。その顔は優しく微笑んでいた。

「起きたのね。」

「晩飯は?」

「……後で用意するから母さんの前に座って。」

いつも優しい母が今までに見せた事のない悲しい表情で言った。俺は黙って椅子に腰掛けた。

「朝に言ってた事?」

母は黙って頷いた。

「…今から言う事はとても大切な事だから、ちゃんと聞いてね。」
思わず俺は唾を飲んだ。

「佳佑、あなたはこれから人間界と天界の狭間にある、異界に行ってもらおうわ。」

一瞬何を言っているのかが全く分からなかった。

「へ？」

と、俺は何とも間抜けな声を出した。

「やっぱり……理解できないわよね。」

悲しげな表情のまま母は言った。

「…実はね。岳宮家は選ばれた家系なの。」

「選ばれた家系……？」

「そう。日本には選ばれた家系は100世帯あるわ。」

「そんだけしかないの!？」

俺は目を見開いて言った。

「…何で選ばれた家系で言われるのかと言うとね、特別な力を扱えるからなの。」

「特別な……力……？」

「その力は……魔法みたいなものね。」

「ま、魔法……!?!？」

そんなものが現実に存在しているとは思わなかった。

「その様子だと、信じてないみたいね。…これが魔法よ。ライトニング。」

母が天井に吊るしてある電気に指を向けた。すると、着いていたはずの電気が急に消えたのだ。

「!」

「今のは雷属性の魔法。電流を遮断させたの。」

お陰で家の中は真っ暗だ。

「ライトニング。」

もう一度同じ事を母がすると、消える前の状態に戻った。

「これで信じてくれる？」

何かの手品かもしれないと思ったが、これは直感的に本当だと思った。

「…わかったよ。信じる。」

「よかった。…じゃあ話しの続きね。何でこの力が身についたのかは……今回の異空間に行く事で分かるわ。」

「ちょ、ちょっと待って！異空間に行くってどうゆうこと？」

「佳佑、これは宿命なの。…あなたは数少ない戦力の一つなのだから。」

母の目からは一筋涙が流れた。

「いってらっしゃい。」

母の笑顔を見た後、視界が消えぼんやりと意識も消えていった。

第四話〜平原と夢〜

視界が戻ってくる。と同時に眩しい太陽の光りが視界を覆い尽くした。眩し過ぎて手で目を覆い隠した程だ。

どうやら俺はどこかの平原で寝転んでいたらしい。まわりが草木しかないからだ。

「……………母さん。」

なぜ母は泣いていたのだろうか。でも、これから旅なのか…。何か無理矢理連れて来られた感じだな…。

辺りを見回してみるが、やはり草木しかなく、人がいる気配が全くなかった。

「とりあえず、歩くか。」

ずっと座ったままというのもあれなので、移動することにした。

魔法か…：母さんの子供だから俺も使えるんだよな。試しに真似してみようかな。

佳佑は一本の木に向かって母と同じようにした。

「ライトニング！」

……何も起きなかった。

「……………」

はあ……………「こういつときって、普通でるよな。そんな自分に少し呆れながら探索を再開する。

もう歩いてどれくらい経つのだろうか……………たぶん30分は経ってるだろう。

ぐるると、お腹がなった。そういえば晩飯を食べてなかったんだ。

「あゝ腹減った〜！」

佳佑は近くにある大木に腰掛けた。

明日からの学校とか大丈夫なのか……………？二日目から登校拒否とか…
…嫌だ！早く帰りてえ。

とか思っていたのだが、いつの間にか眠ってしまった。

そして佳佑は夢を見る。それは偶然に見た夢ではなく、必然に見た夢だった…。

俺は……今何もないとここにいる。見えるところ全部が白色だ。でも、誰かが話し掛ける。誰だろう……。佳佑はその声らしきもの集中した。

「……お……い。」

「あ？」

「ま、ほ……う……を教える。」

「魔法？」

「うむ。」

少しずつだが、徐々にその声はハッキリと聞こえるようになってきた。

「そなたは……まだ……魔法の扱い方を知らない。」

「まあ……な。」

「魔法とは……想像して創造するもの……なのだ。」

「妄想か？」

それなら俺の得意な技だ。

「似ているが違う。」

想像して創造する……か……ちょっと意味わかんねえ。

「一度……試してみるが良い。」

この言葉を最後に、声は消え、先ほどの景色に戻ったのである。

「……ん？…俺、寝てたのか。」

てか変な夢だったなあ。

「ガルルル！」

お腹もガルルル！って鳴いてるしって！違う！

佳佑の前には狼みたいな獣が三匹いるのだ。

「な、なんだこいつら！？」

佳佑は恐怖のあまり動けずにいた。体が小刻みに震える中、右手が勝手に獣の方へ向け……

「ライトニング。」

口が勝手に言葉を発した。そして、電流みたいなのが、獣一体に命中し、黒い光りとともに消えたのである。

「な………！」

それを見た他の二匹が、佳佑に飛び掛かった。佳佑は条件反射で適当なガード体形を取った。

「キャウン！」

犬の鳴き声みたいなのが聞こえた。閉じていた目を開けると、獣の一匹も残っておらず、目の前には鉄の塊みたいな物があった。

第五話　彼女の行動

鉄の塊……と思ったのだが、どうやらそれは間違いらしい。形はちやんと整っていて、恐らく剣であろう。

でも、なんで俺の目の前に剣何かあんの？てかピンチの時に助けが入るって、ベタな展開だな…。

と、助けてもらったのに、恩を仇で返すような事を思っていると、剣の持ち主であろう者が口を開いた。佳佑はそれと同時に顔を上げた。

「君…大丈夫？」

その声はとても優しく、透き通った声だ。それに、想像していた男の声ではなく、女の声だったのだ。

「大丈夫…？」

佳佑を助けた女性は、剣を鞘に納めてもう一度聞いた。

「え……あ、はい。」

「危なかったね。…私が来なければやられてたよ。」

「はあ……。」

「でも、どうしてこんな平原に一人で？」

「……気付いたらここに。」

彼女の顔をずっと凝視出来なかった。何故なら、彼女の背後には日が照っており、眩しいからだ。だからまだ彼女の顔をしっかりと見えない。

「君、名前は？」

「……佳佑。」

「ケイスケ……？」

彼女は怪訝そうな顔で聞き直した。

「はい。…佳佑……岳宮佳佑ですけど。あなたは？」

「そんなことは後！こっちについて来て！」

彼女は急に大きな声を上げたかと思うと、佳佑の手を引っ張り走り出していた。

どうやら彼女は馬に乗っていたようだ。手を引っ張られ、連れて来られたら近くに馬がいたからだ。

「しっかり捕まりなよ」

そう言っただけで彼女が操縦する馬の後ろに乗せてもらったのだ。その間、俺は彼女の身体に身を委ねていた。少し痩せ気味で、無駄な脂肪のない身体をしていた。

服装だが、剣を持っていたので鋼鉄の鎧などかと思っただけ、そうではなく、なんだろう、フツの服装でない事は確かなんだけど、どう説明すればいいかわからない。でも、身動きは取り易そうだった。思った。

少しすると、小さな村に着いた。その少し外れにある小さな馬小屋のある、牧場のような場所に降ろされた。

少し家畜の排泄物の臭いが鼻についた。

「じつちよ」

彼女は足早に小屋の中へ俺を案内した。何を慌てているのだろうか。

それより、ここは本当に何処なんだろうか。

「そこに座って」

俺は彼女の指示に素直に従った。彼女はそれを見届けると、窓についてあるカーテンを閉めた。その行為が少し気になった。

そして全てのカーテンを閉め終わると、彼女は俺の向かいに腰を降ろした。

第六話〜宿命〜

彼女はテーブルに両肘を付き、手を合わせていた。

「まさか、ホントに大白魔導師様の予言通りになるとは……」

彼女は独り言のように呟いた。

「予言……?」

佳佑はその言葉に引っ掛かる。

「…ああ、すまない。自己紹介がまだだったな。私の名は、エルだ」

エル……? 外人なのか? 顔を見る限り日本人みたいなんだけど…。

「大白魔導師様の予言が正しければ、キミは二ホンと言う所から来たのか?」

「はい……」

実際には飛ばされたのだけれど……。

「ふんふん……選ばれし者……？」

「…確か、ここに来る前に、母に言われました」

あの泣きそうな母の顔が頭に浮かんだ。胸の辺りがキュンと痛んだ。

「確定だな。ようこそ、異世界へ」

「は……？」

「うん。ここはね、人間界……地上界って言った方かな？地上界と天界との狭間、異世界って言うんだ」

「はあ……」

先程から相槌しか打てない。

「やっぱり、何にも分かってないみたいだね。この際、分らない事を教えてあげるよ。何でも聞いてよ」

「えっと……あの……予言ってなんですか？」

「この世界には白魔導師つてのが居るんだけど、その中でも一番強くて偉いのが大白魔導師様。各地を転々と旅をして、予言をしてるらしいよ。で、たまたま私が予言されたの」

「何て言われたんですか？」

「ん〜とね、地上界から青年一人来たり、彼の者は希望の光りなり、
つてね」

「希望の……光り？」

「うん。私も良く分かんないけど、キミを守れって言われたよ。そのせいで頭の中に何か刻み込まれたし」

エルは頭をコンコンと突いた。

「刻み込まれたって何をですか？」

「多分、宿命……だろうね」

「宿命……？」

「うん。キミを守る、ね。他には？」

エルはウインクした。口調は男っぽいけど、たまに見せる仕草がとて
も女の子らしい。

「えっと……何で異世界ってあるんですか？」

「異世界ってのは、主に地上界で死んだ人が来る場所だね。ま、地
獄って言い方とは違うけど、生きて来た中での償いをするために暮
らす場所って感じかな？……でも、地上界とあんまり変わらないよ」

「へえ……異世界にこない人も居るんですか？」

「うん。二つのパターンがあるからね。人間誰もが、生涯で一回は
悪い事をしているはずだからね。でも、平均より下の人はそのまま
天界に行くんだ。でも、平均をかなり上回ると下界、地獄だね」

「この異世界では何をして償うんですか？」

「色々あるからね、一概にこれとは言えないね、ま、ホントに地上

界と変わらないよ？結婚も出来るしね」

この発言にはかなり驚いた。

「え！？」

「だって、死んだままの年格好でこの異世界に来るからね、まだ結婚した事無い人だっているよ。だから言ったでしょ？地上界と変わらないって」

「エルさん、若いのに何で地上界に？」

「ああ、それはね、死んだ時の年齢で、各歳に平均があるんだ。だからフツーに暮らしても異世界行きになっちゃうんだ。天界行きなんて極稀だよ？」

「て事は、異世界に行くと、二度と出れないんですか？」

「いや、そうじゃないよ。異世界で死ぬと、そのまま天界に行けるんだ。下界の人も死ぬと、異世界へ行けるんだ。下界の人は、異世界に行った時、地上界で死んだ時の年齢に戻っちゃうけどね」

「…犯罪とかは起きないんですか？」

「そういう、負の感情は全部死んだ時に吸い取られるんだ。だから犯罪は全く起こらない。あるとしたら交通事故くらいかな？」

「じゃあ、地上界で出る幽霊とかは何ですか？」

「あれは、この異世界や、下界の人の、地上界への残留思念だよ」

大体分かってきたけど、何で俺はこの世界に居るんだ？

「俺は……死んだんですか？」

「……いや、違うと思うよ。キミは多分数十年に一度の使者だろうね」

「使者……。僕はこの世界で何をすれば地上界に帰れるんですか？」

「……ごめん、それは分らない」

エルは顔をしかめてそう言った。

「そうですね…」

佳佑は意気消沈といった感じで椅子に深く座り直した。

「今日はもう寝よう。疲れたろ？」

佳佑は静かに頷いた。

誰が使っていたが分からないけど、生活するには不自由な作り
の部屋だ。

息を吹きながらベットに寝転がった。横にある、少し大きめの窓か
ら月明りが差し込んでいる。

「宿命…か」

この言葉が浮かんだ。

俺がここに飛ばされたのは宿命なんだろうか…。

俺はこれから…これからどうすれば…。

「母さん…」

佳佑はゆっくりと目を閉じた。

第七話〜戦術指南〜

朝、目が覚めた。と言うより、起こされた。そう、エルに。

開かない目を擦りながら食卓へ向かう。この家は一階建てで、階段はない。今の状態なら階段から落ちていただろう。

何かのスープの匂いが佳佑の鼻孔を刺激した。

「…良い匂い」

そう言いながら腰掛けた。

「旨そうですね？でも、先に顔洗ってきなさい」

「どこにあるんすか？」

「玄関を出て直ぐ右手に水道があるから、そこで、顔や手を洗ってね」

「ほい」

「はい」

顔を洗った俺はエルの作った朝食に舌鼓を打っていた。

「でしょ？料理には自信あるんだ。地上界で料理人を目指していたからね」

「へえ……そう言えば、エルって何歳なんすか？」

「デリカシーの欠片も無いね」

殺気の籠った目を向けられる。

「ま、いいや。そんなサバ読む程の年齢じゃないし、…19だよ」

「あ、俺とあんまり変わんないっすね」

「16……だったっけ？3年も歳が空くと、だいぶ違っもんだよ」

「そっなんすか……？」

「ま、直にわかるさ、それより、敬語は辞めよう。そっちも慣れてないようだし」

「……すいません、どうも慣れなくて、これからはタメ口を聞かせてもらいます」

タメ口と言ったものの、まだ敬語が抜け切れていない俺だった。

食事を終え、後片付けを済ました後、エルに連れられ、野原に来ていた。

「佳佑、君に教えておかなければいけないことがある」

エルの髪が風で靡いた。金色のそれはとても美しかった。

「あ、はい？」

「昨日話した、異世界と地上界との事だけど、何処に行っても、皆自国の言葉に翻訳されている。つまり、私はヨーロッパ出身なので当然英語だ。だから君が話す言葉は全て英語だ」

「てことは……」

「そう。私は英語で君に話しかけている。けれど、日本語だろ？」

「はい。バリバリの日本語です」

なんて上手く出来ている世界なんだろう……。俺が英語をしゃべっているのか……。

夢のまた夢だな。

佳佑は自嘲した。

「何を笑っている?」

「いや、あの、何でもない」

「そうか、なら二つ目に行くぞ、これは異世界と地上界との『違いだ』」

「違い……?」

「ああ、決定的な『違い』だ」

「何なんですか?」

俺の頭の中には?マークが多数浮かんでいる。

「魔法だ」

「あ……」

「この世界では全員ではないが、魔法を使える者がいる。それはどうしてかは分からないけど」

佳佑は昨日の事を思い出しながら右手を見た。

『想像して創造する』

と、あの謎の言葉が浮かんだ時、右手が雷を纏って光り出した。

第八話 戦術指南 2

「それは……？」

「え？…あ！」

まさかまた出るとは思わなかった。

エルにどう説明すれば良いか分からない。

「流石……使者だね。何のアドバイスも無しに魔力を扱っている」

「何か……勝手に」

「勝手に？…頭の中で何を思った？」

「想像して創造しました」

エルはその言葉を聞いて、大きく頷いた。

「でしょ？それが基礎の基礎よ」

エルは辺りを見回した。そして指差した。

「あそのの木に目掛けて、その雷を放つて」

ここから少し先の森、その先頭にある木だった。

「……ふん！」

届くかどうか分からなかった。だからただ思いつ切り、雷を放った。

『バーン！！』

「！！！」

「！！！」

見事に命中した木は、物凄い衝撃音と共に燃え始めた。

「これほどとは……」

エルは呆然と立ち尽くしている。その間にも木は燃え盛っている。このままでは他の木々にも燃え広がり、山火事が発生しそうだ。

「……………どうすんの？」

自分でもびっくりな事過ぎて、他人事の様に見える。

「任して！…スプラッシュ！」

燃え盛る木を囲む様に、水柱が現れ、そのまま木を飲み込んだ。次に姿を現した時には完全に鎮火されていた。

「すげえ……………」

佳佑はあんな事も出来るんだと驚嘆した。

「こつちの台詞だよ。まさかあんなに威力の高い初級魔術を使うんだから」

「初級魔術？」

「うん、下位ランクのね。ま、誰でも使える魔法ってことだよ」

佳佑はまた右手を見た。今はフツの状態だが、何故か先程の雷を帯びている状態よりも、恐ろしく思えた。

下があれば上がある。初級……中級……上級、それを扱う時、俺は何を思っているのだろうか……。

「まあ、一通り説明したけど、理解出来て無いよね？」

確かに、呪文やら属性やら、色々な事が入り交じって、全く理解出来ていない。

「…よし、学校に通える様にするよ」

「は？」

突拍子もない一言だった。

「学校：？」

何でこんな処まで来て学校何かに通わなければいけないんだ。

「そう、魔術師養成学校」

「魔術師：？」

ってことは、英語や数学が無いって事？

「手続きしとくけど……いい？」

「はい！」

それならば、断る理由も無い。実は、魔法についてはかなり興味がある。養成学校と言っのだから、魔法だけをするんだろう、それなら全然大丈夫だ。

第九話　苦悩

掃除が行き届いている廊下、教室、そしてトイレ。これも魔法でしたのだろうか。

そう。ここは学校。作りは大学のキャンパスのような処だ。新築したのか？と言っくらい綺麗だ。

俺はこの学校に転校生として、やって来たが、クラスの連中とは全く溶け込めない。

皆違う年齢で違う国籍。しかし、使う言葉は全て日本語。全く、おかしい話だ。

そして、今、講義を受けている。勿論魔法に付いてのだ。だが、思ったよりも理解に苦しんでいる。

拳句の果てには地上界の時みたく、頼杖を付き、片手でペンを回し、全く他の事を考えている始末だ。

「はあ……」

使者……か、なんでこんな事になったのか、今でもあんまり理解出来てねえし。

何か、ホント、状況に流されてるって感じで、自分で行動取ってる気がしねえし。

でも、そうしないとどうなるか分からないし…。

「はあ………」

また一つ、佳佑はため息をついた。

講義はまだ続いているが、佳佑は自分なりに魔法に関する事をまとめていた。ある程度ははしょってはいるが、受ける以前よりかは、大分理解している。

属性、系統、相性、複合、治癒、e t c……。

しかし、まだまだ講義は続きそうだ。

それから3日後、佳佑の所属している初級クラスでは、実技講習が行われていた。

あらゆる属性の魔法を扱う練習だ。

『想像して創造する』

やはりこの言葉がキーワードのようだ。

「それでは、まずは火の属性からだ」

講師に呼ばれる順番に挑戦していく。まだ魔法を扱えない者や、扱えても、威力が弱い者ばかりであった。

そこで、いよいよ呼ばれたのが俺だ。

「はっ！」

熱風が吹き抜け、対象物を瞬く間に燃やし尽くしてしまった。

自分で言うのも何だが、回りの生徒とは桁違いだ。

その講師も啞然としている。そして、直ぐ俺は呼ばれた。

「キミ、明日から中級クラスに転入ね」

「はっ？」

いやいやいや、おかしいだろ！そんな一回魔法使っただけで、進級
つて！でも、まあ、うれしい事だけれど、エルに報告した方が
良いよな…。

そんなこんなで佳佑は学校を後にした。

「ただいま」

少し重い足取りで帰路に着いた。何故なら、エルの家から学校までは徒歩20分。砂利道を歩き続けるのは慣れて無く、少し靴擦れしてしまったようだ。

「おかえり」

奥からエルの声が聞こえた。それと同時に刃物がまな板を叩いている音が聞こえて来る。

どうやら晩ご飯の支度中らしい。流石に料理人を目指してただけのことはある。トントンとリズムミカルな音だからだ。

今日は何の料理だろうか、そんなことを思っていると、エルが食卓の椅子に腰掛けた。

「よし、後は煮込むのを待つだけ、後少し待ってくれるか？」

今日は煮込み料理らしい。

「ふう、今日も疲れたよ」

俺も椅子に腰掛けた。

「今日はどうだった？」

「ぼちぼち……中級クラスに転入したよ」

「……………」

エルは何も言わなかった。

「……………」

俺は首を傾げた。もしかすると、聞き取れなかったのかもしれない。

もう一度口を開こうとすると、先にエルが口を開いた。

「やっぱり…そんな事だろうと思ってたよ」

ため息混じりにそう言った。

「なんで？」

「佳佑の魔力はすば抜けてるし、才能もあるからね」

「どうやら褒められたようだ。少し皮肉混じりのような気もするが…。」

「……」

しばしの沈黙が訪れた。耳に入ってくるのはグツグツと、水が沸騰している音だけだった。

少しの沈黙が俺の質問を生み出した。いや、疑問だ。何故か今になって疑問が生まれたのだ。

「何でさ、この世界に魔法っていう特殊能力があんの？」

これはホントに素朴な疑問だ。

「だってさ、地上界と何も変わらないって言ったじゃん」

「それは……何故だか分らない。私達は地上界で死んだ瞬間、この世界に飛ばされる。……魔法が脳に刻み込まれているんだ。だから何と言うか、口で上手く説明出来ない。だけど多分、死んでもないのにこの異世界にいる佳佑は、魔法を学び、地上界に戻って何か使命を果たさなくてはいけないんじゃないかな？……でも、私達にとって、魔法は娯楽の一つみたいな物だから……」

「……」

俺は答える代わりに、エルの話を自分なりにまとめてみた。魔法は……天上界が、一度人生を終えた人々へのプレゼントで、俺は、地上界で『何か』が起こるための保護なのだ。

「はぁ……」

まとめてみたが、全てが的外れな事かもしれない。でも、何をすれば良いのか分からない。今はただ魔法を学ぶ事しか意味がないように思える。

不安、疑問、使命、孤独……

色んな感情が佳佑の心を満たしていた。そしてそれは日に日に増して行った。

第十話〜実戦〜（前書き）

更新が遅くなりまして、申し訳ございません。

第十話　〜実戦〜

そして数日後、上級クラスになり、遂に卒業試験のみとなった。これで卒業出来れば、大記録らしい。普通なら一年以上掛かるのに、たった一ヶ月だからだ。

相手はここで講師をしている2人だ。2対1……普通の卒業試験なら1対1のタイマンなのだが、俺は特別らしく、不利な状況での戦いを用意された。

勝負は勝てば良いらしい。やはり、相手は講師をしているだけあって、闘気に満ち溢れた魔力が身体を包んでいる。

「はじめ！」

審判のコールで構える。相手が未知数なため、俺はじっと構え、相手の動向を伺う。

相手の一人が地面に手を押し付けた。すると、こちらに向かって地割れが発生した。

俺は横に逃げた。横から蹴りが入る。左腕でガードするも、至近距離からの攻撃で、佳佑は飛ばされたが、何とか受け身をとる。

「これが卒業試験かよ……。半端じゃねえな」

でも、やられてばかりじゃいかねえな。

「フレイムガン！」

佳佑は右手から赤い、火の玉を相手に投げ付けた。

しかし、簡単にそれは避けられる。

「その程度か……」

「ふ…甘い。セイントカッター！」

光りの無数の刃が相手に切りかかった。

「ぐあああ……」

相手は膝を着いた。

「！」

佳佑は相手に近付き、回し蹴りをするが、味方の一人が寸前でガードした。

「ち………やっぱ、簡単には片付けられないな」

この技で決めるか。

佳佑は右手を天に向かって上げた。

第十一話 慈悲と疲労感 (前書き)

かなり久し振りの更新です。長い間…スランプというかなんというか……。

色々ありまして、少しずつ書き進めての更新になりました。これからも頑張りますので、温かい目で見守って下さい。

第十一話 慈悲と疲労感

試験官からすれば、今の佳佑の状態はあまりに無防備。

右手を高々と上げ、まるで警戒心がない。

普段なら飛び出し、攻撃を加えるのだが、先程の佳佑の台詞を警戒し、二人は飛び出せずにいた。

「…シールドの用意をしとけ」

「OK。恐らく火炎性の魔術だ。あいつ自身、得意な属性だからな」

「なら、火炎耐性だな」

一人は手を突き出し、シールドを出した相方に触れた。

「よし、準備完了だ。…奴の攻撃を待つのか？」

「馬鹿、そこまで甘くねえよ」

一人の試験官はニヤリと不適に笑った。

「ファイアウォール！」

火の壁が佳佑を囲った。中の温度を上げ、焼倒す術。しかし、大概は酸欠で気絶する。

「…やり過ぎじゃないか？」

片膝をつき、シールドを生成している試験官が言った。

「ちゃんと手加減しているさ。上級魔術だが、威力は低めに設定したからな」

そろそろか、と呟き試験官は術を解いた。

「な!？」

佳佑は無傷のまま立っていた。先程まで上げていた右手は、今はこちらを向いている。

「一度に二つの魔術を使ったのか!？」

「心言魔法と言霊魔法の同時発動か…。規格外だな」

今度は佳佑が不適に笑った。

「終わりだ!バーティカルレイド!」

「シールドだ!」

「了解!」

佳佑が放った術、火の雨が対象者を燃やし尽くす術。

試験官達はシールドの中に入り、火の雨を凌いでいた。

「こんなものか?」

一人が挑発する。

「さあな…レイド」

佳佑は右手を地面に当て、そう呟いた。

「！」

試験官達がいたところの地面から炎が噴き荒らした。

それは赤く、幻想的にさえ見えた。

この術も上級魔術なので、普通のシールドなら破壊されてもおかしくないが、このシールドは火炎耐性が付加され、割れずに残っている。

そのせいでシールド内は酸欠や高温状態に達していた。

するとシールドは割れ、炎が上空へ舞い上がった。

そして中から試験官が出てきた。

「一応…手加減しましたけど？」

「……嫌味か？」

どうやら嫌味に聞こえたらしい。

「とりあえず、試験終了。こいつを医務室へ」

シールドを張っていた試験官が気絶している。

「……結果は後日、場所日時を追って報告する」

「帰っても良いんですか？」

呆れた奴だ。普通気絶している奴の事を心配するだろ。

「ああ」

試験官は冷めた目で佳佑を見ていた。

すると、笑顔でこちらに近づいてきたのだ。

「嘘ですよ。ちゃんと治癒しますから」

少し火傷の負った試験官の身体に手を当てると、水色の淡く、美しい輝きを放った。

すると、みるみる火傷はなくなり、先程の戦闘での傷はほぼ全て癒えていた。

そう、治療術である。治療系統の魔術は、水属性を基本とするため、水色や青色の光りがでる。

「…直ぐに目を覚ますと思いますよ？」

気絶をしていない方の試験官は、感謝のセリフを述べようとしたが、それは違うなど一人考えながらも、驚嘆していた。

治療術は治療術士ヒーラーと呼ばれる、その手の才能があるものが出来る術であり、誰もが扱える訳ではないからである。

ほんと……こいつは凄い奴だ。

「それじゃ、俺はもう帰りますね」

良い試合をしたからか、笑顔で佳佑は帰って行った。

「ただいま」

少し疲れた身体を癒そうと、エルの顔を見ずに佳佑は部屋に入った。

奥の方でおかえりと言うエルの声が聞こえた。ただ、その声を聞く時には既に扉を閉めていたためぐぐもった声だった。

バタン、

その音で気が付いたのか、それとも自分がいないのに気が付いたのかは分からないが、直ぐにエルは扉をノックした。

「……………入るよ？」

「……………」

俺は何も答えなかった。エルは無言の肯定だと思ったのか、そのまま中に入ってきた。

特に用はなかったかが、別に入られて困る事はなかったため、俺はその動きに何も言わなかった。

「……どうした？電気も点けないで。…体調が悪いのか？」

「そうじゃないよ……」

エルが少し心配した声色なので、バツの悪そうな顔でそう答えた。

「今日の卒業試験……だめだった？」

今日の事はエルにも伝えてあった。なので朝には、スタミナをつくものを食べさせてあげる！

と言われ、朝食を大量に食べさせられた。

「佳佑なら大丈夫だと思ったんだけどね……」

「いや、多分受かったよ。……ただ、なんか疲れた」

全身が気怠い。

試験後からの帰り道は、特に堪えた。

そんな疲れたことしたっけな……？術使い過ぎてない訳だし。

「……ちよつと額出して」

横になっていた身体を起こし、前髪を手であげた。

額に温かい感触。とりあえず、怠い感じが続いていたので、目を閉じていたので直ぐには分からなかったが、感覚からしてそれはエルの手だとわかった。

体温でも測っているのだろうか…。

「…ふんふん。なるほどね」

一人何かを悟ったように頷く。

「魔術の使い過ぎだな」

吐き出した息とともに短く言った。

「…？そんなに今日は魔術は使ってないぜ？」

あげた前髪をおろし、痒くなったのでがしがしと掻きまをる。

「てかさ、なんでそんな事わかんのか？」

当然とも言える疑問だった。ただ額に手を当てただけなのだ。

根拠のないただの気休めか？

「…私は探知能力に長けているからな、それぐらい簡単にわかるさ」

探知能力…？ああ、なんか講義でそんなことを習ったような…。

だめだ、頭が上手く回らない。身体から、虚脱。何かが抜け落ちる。瞼が重い。睡魔……？分からない。でも脳がもう根をあげてる。

「……………話はまた、あと、で」

佳佑、おい！

という言葉を最後に、俺の意識は夢の中へと消えていった……。

第十二話 原因究明（前書き）

また……亀更新

そして、佳佑たちの口調変化

感想お願いします！

第十二話 原因究明

「……………」

目が覚めた。
今何時だ…？

顔を上げ、掛けてある時計を見上げる。

げ…もうこんな時間かよ。エル怒ってるだろなあ。

それもそのはずで、晩飯と話をすっぱかし、眠りに入ってしまったからだ。

それにしても身体が軽い。さっきの疲労感が嘘みたいだ。ん…魔力が戻ったからか？

まあ、いいや。

エルの機嫌でも取りに行くかな。

居間に入るとエルがチラシを見ながら俺を見上げた。机には料理が乗っている。

「…ああ、もう大丈夫？」

「うん、いめん」

「ん？…ああ、ご飯なら大丈夫だよ」

どうやら起こってはなさそうだ。そのまま俺は椅子に腰掛けた。

「なに見てんの？」

「ん？…ああこれだよ」

白い紙にでかかど、武闘大会、と書かれている。

「武闘大会……エル出るの？」

「いや、私は出ないよ。出るのは佳佑だよ」

「は？」

何を言い出すんだ……俺は首を傾げた。

「メリットでもあるの?」

「…ん…メリットていうか、何というか、まあ実践経験を積むためだ」

「……それは卒業試験に受かってから決めることだろ?早計過ぎないか?」

「いや、受かってるよ。さっき連絡があってね、歴代一位の結果だつてさ」

いつの間に……後日結果発表って言ってたよな?

「…ああ、合否の連絡がある前に私が根回ししておいた」

「は、はあ!?!…なんでそんな必要が!?!」

エルの意図が全く読み取れない。

「…忘れた?私は、あの白魔導師様の言うことを守っているだけだ」

白魔導師……エルと俺を引き合わせたと言っても過言ではない、謎の人物。なぜこの平穏な世界にそんな存在が、預言者なんか必要なのか……。エルはもしかして何か隠しているのだろうか……。

「ちなみに大会は来週。それまでに特訓でもしようか。どうせ参加するなら優勝だ」

どうやら断れないらしい。……さっきと何ら変わらない表情は、先程の邪念を振り払うのには十分だった。

一夜明けた昼。

ちよつと鍛錬でもしようか、とエルの誘いに応じ、街はずれの草原に来ていた。

つまり、俺が元の世界から飛ばされて初めて目覚めた場所だ。

「佳佑。ちよつと中級レベルの術を空に放ってくれないか？」

風の術で良いか。

俺は普段通りに発動させた。

「エアースョット！」

無数の風の玉が空気を切り裂いた。

風を圧縮して、それを放つからなかなか攻撃力は高いんだけど、まだ人に向かって撃つたことはない。

「…やっぱりね」

腕を組み、術を見るのではなく、発動させた佳佑を見つめてそう呟いた。

「心言魔法と言霊魔法って知ってるよね？」

「ああ。確か……学校で。詳しい事はあまり覚えていない……」

折角学校に通わせてもらったのに、真面目に勉強してなかったのがこんな所で露呈するとは。

「…まず、心言とは、簡単に言えば声に出さずに行う魔術の発動形態で、言霊魔法はその逆」

「あ、何か聞いたことあるかも」

「この2つの大きな違い、つまり、メリットとデメリット。心言は詠唱が速く、どのような術かも読まれないが、コントロールが難しく、消費魔力も格段に上がる。次に言霊魔法はコントロールがしやすく、魔力もそれに見合った消費量で済むが、時間が掛かる上、相手にどんな術かバレる可能性がある。……ここまで分かる？」

「ば、ばかにするなって……」

そこまで頭は悪くない！ただちょっとこんがらがってるけど…。

「…この前の試験の後、直ぐ寝てしまったら？それは恐らく、過度の魔力行使で身体が慌てて本能的な防衛に入ったためだと思う」

「…じゃあ連続して心言魔法出来る身体ではないってこと？」

「それは違う。…知らないと思うけど、佳佑は莫大な魔力を保持している。さらに、それに見合う魔力耐性も持ち合わせている。…私とは比べ物にならないくらいに」

少し皮肉ったようにエルは言った。

「多分、身体は拒絶したのではなく、驚いたのだろう」

俺が異世界に来てまだ日は浅いし、確かに、卒業試験のときはいつもより全然力遣ったし。

「…拒絶とかって？」

「そこまでは行かないが、身体が有する総魔力量を越えると肉体破壊、能力暴走といった障害が生じるんだ。…ま、佳佑は大丈夫」

何ともしっくりこない意見な事で…。

「よし、じゃあ今日は心言魔法の特訓だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3356d/>

今、希望の光へ

2011年1月18日03時06分発行